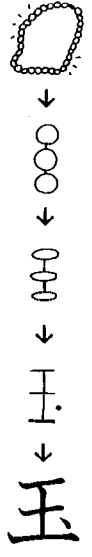


# 玉

一年  
筆順 一 丁 王 玉  
オ ン ギ ヨ ク  
たま

成り立ち



たくさんのいみをあらわす「三つ」の「たま」をひも  
でとおしたかたちの字です。「かたくてうつくしい石」<sup>いし</sup>「宝  
石」<sup>ほくし</sup>をあらわした字です。「玉」といいます。

おおくは、みがいて「まるいたま」につくりますので  
「たま」といういいかたをするようになりました。

「玉」では「王さま」の「王」とくべつがつかないの  
で、「たま」のしるしの「」をつけて「玉」としました。  
しかし、「へん」のときは「玉」で、「」をつけません。  
よむときは「玉へん」といわないで「玉へん」といいま  
す。

「玉」の字いろいろ

理(2年242)、球(3年280)、現(5年701)、班(6年980)など。

▽「玉みがかざれば光なし」とは、生まれつきどんなに  
すぐれた人でもべんきょうしなければ、けつしてりつ  
ばな人にはなれないことをいっただけです。

熟語例

- ▽宝玉(宝ものの玉。宝石の玉)
- ▽美玉(美しい玉。美しい宝玉)
- ▽紅玉(紅いろの宝玉。ルビーという宝石のこと。また、  
リンゴのしゅるいの名まえにあります。)
- ▽玉露(玉のような露。露の美しさを玉にたとえたもの  
です。また、上とうなお茶の名まえ)
- ▽玉杯(宝玉でつくった杯)
- ▽玉稿(あい手の原稿をうやまわってといういいかた)
- ▽玉顔(あい手の顔をうやまわってといういいかた)
- ▽玉堂(りっぱな家のこと。)
- ▽玉にきず(ぜんたいとしては「りつぱ」であるが、そ  
の中に、ほんのすこしだが「けつてん」がある、とい  
うときにいいます。)
- ▽玉石混交(宝石とただの石とが混じっているというこ  
とで、よいものとわるいものが混りあっていること。)

使い方

# 金

一年  
筆順 へ へ 今 金 金  
オ ン キ ン ・ コ ン  
かね・かな

成り立ち



「土」のなかにあって、土のなかからとる「金どくる  
い」をあらわした「土」に、この字のよみかたをあらわ  
した「今」(漢音はキン、呉音はコン)をくわえてつくつ  
た字です。

「金どくるい」といういみの字ですが、金どくるいの  
なかでいちばんぬうちのあるものを「金」というように  
なりました。いまでは、ただ「金」といえば、この金の  
ことであって、もとのいみの金は「金どく」というよう  
になりました。また、金がいみの金どくをあらわす字が、  
「銀・銅・鉄・錫」などたくさんつくられました。

「金色」は、普通は「キンいろ」と重箱読みするが、  
古くは「コンジキ」と呉音で読んだ。

使い方

- ▽あたらしい「お金」は「金いろ」にひかかっていて、と  
てもきれいです。
- ▽この「金物」は「合金」でつくられています。

熟語例

- ▽金蔵(お金やたからものをしまっておくお蔵)
- ▽金物(金属でつくられた物)
- ▽金属(金・銀・銅・鉄など鉱物のなかま。「属(5年176)」  
は「なかま」のいみ)
- ▽合金(二つ以上の金属をとかし合わせてできた金  
属のこと。)
- ▽金貨(貨は「貨幣」で、「お金」のこと。「金のお金」。  
むかしの「こばん」は金貨でした。いまでは、銀貨、  
銅貨、白銅貨などがあります。)
- ▽金言(金のように貴重な言葉。「格言」ともいいます。  
よの中の「しんり」をうまくいあらわしたことは)  
▽金堂(「金色のお堂」ということで、お寺の本堂のこ  
と。)
- ▽金剛石(金剛は「ひじょうにかたくこわれないもの」  
といういみ。ダイヤモンドのこと。)